『國民新報』1940年10月20日

[主張]　若人の感激

　十月九日には年のがあつた。にをひ、四千のがたるもく、にはせて、々とするは、まことにそのまゝであつた。あのにをはせたらになるのだ。なるをものへるには一もさせはしないんだと、いをけないものはなかつたであらう。あれとははなかつたとしたものもあるであらう。

年にいては、

「年のはとの一となるものである。つてのはとにをするがにらくはこののためにのとをもつてのとしてのをせよ」

とへられてり、年には、

「年は、のにをけたるにし、の彌榮を一するとに、々のをし、ゐてとしてののひをくし、々てに參じんでにひたてまつらんことをす」

とある。

　のと年のとにぴつたりと一し、そのをるゝもない。一つの一つといふべきであらう。

　たるもの、よろしく、このをすべきである。ちたるのとをてし、『八紘一のにり、の一に參じ、のにせんことを』し、『のを』し、『のにめ、をのとし、つてにせんことをす』べきである。これのはすべて、されざるであり、、であることをくかにすべきである。

　にして、いまだのには、がにへるものがあるかにはれてゐる。は、よろしく、のをき、をへて、にはるやうをすべきである。一の年をもきりにせず、ひせぬやうするのは、一にのといはなければならない。